

みるくる がたる

千葉県立美術館報
VOL. 17 NO.1

(通巻64号)

平成2年6月10日発行

編集・発行人 竹内一雄

〒260

千葉市中央港1丁目10番1号

☎0472-42-8311 (代表)

石井林響

「蓬萊仙境之図」

(絹本着色・一九二七年)



(前川公秀)

蓬萊は、中国の伝説で東海中にあつて仙人が住み、不死の地とされる山です。高くそびえる靈峰、隆々たる山肌、その間を流れ海に至る川。全てを動きのある筆運で描いています。

作者林響は、画家として決して恵まれた歩みをしたとは言えません。明治41年師橋本雅邦の死後、画壇の主流である院展から離れ、次第に孤立化していきます。しかし、ひとり画題を高め、中国の画家石濤に私淑し独自の南画の世界を表現しようとしたしました。

大正15年弧立の世界から自然との同化を求め、房総の閑地宮谷へ移住します。林響にとって、最も充実していた時期でありました。しかし、その生活も、2年後の昭和4年5月突然の脳出血で崩れ去ります。奇跡的に回復に向いますが、翌年再び倒れ、45年の短い生涯を終えました。

この作品には、林響の求めた南画の世界が見事に展開しています。年記により昭和2年の作であることが判ります。この頃病魔の襲来を予測していくかの如く蓬萊山や桃源郷などの理想郷を主題とした数多くの作品を描いています。

県民の日 記念事業

みる（展覧会）

特別展
石井林響をめぐる画家たち

三

明治34年、
画家林響

石井林響 初め天風と号す
橋本雅邦に師事。一時期「西園の関雪、東の林響」と称されまし
た。しかし、現在、この画家の名を知る人は少なくなりました。
した。それは、林響が中央画壇から離れていったためと思
われます。

誕生から画家へ

林響は明治17年（一八八四）千葉市下大和田で農家を営む。

石井治郎助の3男として生まれました。3歳の時、かまどに落ち頭に火傷を負い、その傷を隠す為生涯総髪で通しました。旧制千葉中学（現、県立千葉高等学校）で、国画教師堀江正章に画才を見出だされ、明治33年母の死を契機に上京、東京美術学校に入るべく共立美術学校で洋画を学びます。が、横山大観・下村觀山・菱田春草の作品を見て感激し、日本画家になることを決意し

より一画壇の若手リーターとして活躍しています。しかし、この着実な歩みは、明治41年の雅邦の死を境に乱れ始めます。同門たちが次々に去った二葉会を林響は守り続けます。再興院展に院友として推挙されますが、安田靭彦、小林古径らが重視されていくなか、林響は次第に離れて行きます。一方、官展へも断続的にしか

年文展開設に伴う審査員任命の紛争により新派系小会派の大同団結で組織された国画玉成会に、雅邦塾二葉会の代表として参加。雅邦の狩野派の画法を基礎に、洋画からの写実と構図を取り入れた画風に

明治34年、觀山の勧めで橋本雅邦の門に入ります。たちまちその才能を發揮し、二葉会・研精会などの展覧会に出品し、受賞しました。明治40年に退院となり、主に東京で活動するようになります。

出品せず 中央画壇から孤立

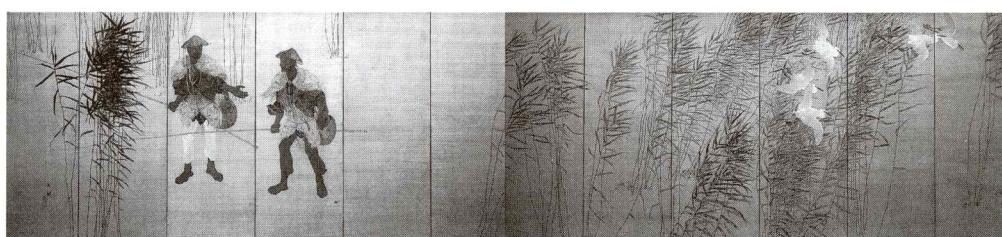
出品せず、中央画壇から孤立して行きます。新奇を追いすが堕落して行く画壇から離れ自らの画趣を高め、独自の画風の確立をめざし、中国清代の画家石涛に私淑し、南画に傾倒しはじめます。

大正12年の父の死も重なり煩わしい世界から逃れ生地房総の大網白里町宮谷に移住する決意をします。

大正12年の父の死も重なり煩わしい世界から逃れ生地房総の大網白里町宮谷に移住する決意をします。

宮谷での晩年

大正15年、東京から大工を連れ画室を新築します。この画室は、飼育されていた白鸕鷀に因み「白闌亭」と名付けられました。独自の画風をめざし意欲的に描き、生涯の中で最も盛んな創作時期であったようです。特に、自然と同化し、題材として、昭和2年帝展に「野趣二題」を出品しています。叢生する梅枝に鳴き遊ぶ小禽の楽しさ、池中に遊ぶ魚類の楽しさを画面いっぱいに表現し、自然と共に生きようとする林饗の心境を、躍動的な線で描き上げています。しかし、この幸福な生活も長くは続くななく、昭和4年3月突然脳出血に襲われ、一時危篤状態になります。



「白映」



「野 趣 二 題」



す。奇跡的にも快方に向かい、再び描くことに情熱を傾けましたが、翌5年（一九三〇）2月またもや脳溢血で倒れ、同月25日死去しました。45年間の画家としての短い生涯でした。

展覧会について

今回の展覧会では、林響の生涯にわたる作品一六三点をはじめ、洋画・書・陶器などの資料もあわせて展示します。

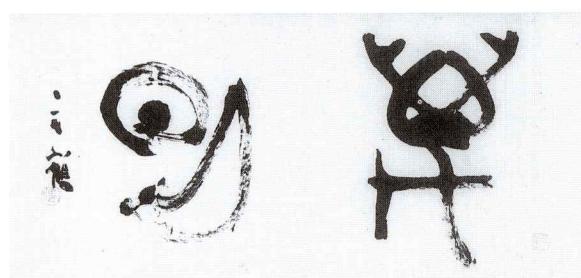
（観覧料）
一般吾円（三〇円）、高・大学生三〇円（一百円）、小・中学生三〇円（七〇円）（ ）は三十名以上の団体料金。なお、県民の日は無料です。

（前川公秀）

果たした役割を回顧しようとするものです。
また、林響と関係の深い画家のなかから、師橋本雅邦をはじめとし、同時期共に活躍した下村觀山・今村紫紅・前田青邨・小林古径・安田鞆彦・島田墨仙・山内多門・勝田蕉琴・橋本閑雪・また画風が似ている平福百穂の作品も紹介します。



「一笑千山青」



「万 昌」

本展覧会は、鈴木方鶴の作品約70点、その他関係資料を一堂に展示し、その偉業を願します。

房総の美術家シリーズ 20

90.9.13(木)～10.14(日)

鈴木方鶴展

房総の美術家シリーズは、房総に生まれ、あるいは定住して活躍し、美術振興に貢献した美術家の再発見と顕彰をめざし行つてまいりました。

第20回を迎えた今年度は、本県書道界において活躍した書家・鈴木方鶴をとりあげ実

施します。
同校在学中に書を浅見喜舟に学び号を受けました。

鈴木方鶴（本名憲一）は、大正7年（一九一八年）に香取郡山田町に生まれ、千葉師範学校（現千葉大学）に学び、和60年に「一笑千山青」がオーベッティ国際賞を受賞するなど、多くの栄誉に輝いています。

書の古典を唐代までとして常にその追求に努め、特に六朝時代に焦点を置いてその研究を深め、優れた臨書を残しています。

一方、中林梧竹や比田井天来、渡辺沙鷗らに私淑しましたが、中でも日下部鳴鶴の高弟である渡辺沙鷗には、昭和16年、師事した田代秋鶴宅に掲げられていた「触目会心」という書によつて出会い、その後の書作に大きな影響を受けたといわれています。沙鷗の研究に情熱を傾け、後にその成果を大著「渡辺沙鷗作品集」に結実させ、書道史研究にも優れた業績を残しています。

に定年までの30年間勤務し、そのかたわら書に打ち込み多く後進を育てました。

日本書道美術院展では、昭和60年に「一笑千山青」がオーベッティ国際賞を受賞する

かたる・つくる

(講演会・実技講座等)

情報資料室だより

—寄贈図書の紹介—

千葉市在中の鈴木満平氏から昭和60、61年度に続き、今年度も展覧会図録150冊を寄贈頂きました。図録は展覧会の記録であり、会期以外には二度と入手できないものが多く非常に貴重な資料です。

鈴木氏は熱心な美術愛好家で寄贈された図録の展覧会は全て御本人が御覧になつたものとのことです。厚く御礼申し上げます。



—展覧会関係—

図書の御案内

情報資料室では展覧会に関係した資料として以下のものをそろえています。展覧会鑑賞と共にぜひ御利用下さい。

●石井林響 関係

「画生活隨筆」 140~149頁
この本はアトリエ誌にかけて寄稿した美術家達の随筆等を編集した本です。無

類の鳥愛好家だった林響は、この中で少年の日の白文鳥との出会いから始まって、

情報資料室は、活用の方法によって様々な楽しみ方や学び方ができます。以下にその

—利用案内—

(1) **へ資料が図書の場合**

書名・人名・内容から調べ

事ができます。人名は著者をさす場合と本文中の人

物をさす場合との両方を兼ねています。内容は、美術

一般・絵画・版画・書・彫

刻・工芸・デザイン・写真

に大別し、それをまた辞典・

便覧・図集・理論・発展史

(地域・時代別)・作家別

(作品・伝記・著述)・材

料、技法・題材別・教育・

政策ほかに分類しています。

●鈴木方鶴 関係

「鈴木方鶴作品集」
書を極めて40年余りの年月を経た著者の第6回目の個展にちなんで出版されたものです。

●鈴木方鶴 遺墨集

氏自ら生前に、遺墨展の際に出品してほしいと書き残して用意してあつた9点

●石井林響 関係

の作品を初め全120余点で構成されています。作家の活動の全貌を物語る一冊です。

(2) **へ資料が図録(展覧会カタログ)の場合**

図録は公開していません

が、カード目録を御覧いた

だき、希望があればお見せ

します。書名・人名・件名・

団体展に分類しています。

(3) **へ資料が雑誌の場合**

誌名・発行年月、号数から

調べることができます。

●資料が新聞の場合

新聞記事のスクラップは過

去10年に渡り用意していま

す。年度別に、内容を県内

展・県外展・美術評論・作

家情報・施設モニュメント

関係等に分けて記事を網羅

しています。

(5) **へ資料が年報・紀要・収蔵品目録の場合**

それぞれ、発行機関名と号数から調べることができます。

(6) **へ本館に作品を収蔵している作家について知りたい場合**

その作家に関する新聞記事や関係記事を掲載している

雑誌・ポストカード・ポスター・小冊子等、御覧頂けます。

第1回

日時

6月16日(土) 2時

演題

「石井林響とその時代」

講師

細野正信氏

(7) **へこれから始まる、もししくは開催中の展覧会、個展、興味深いイベントについて知りたい場合**

日時

7月7日(土) 2時

演題

「南画と近代日本画」

講師

鈴木進氏(美術評論家)

第2回

日時

9月22日(土) 2時

演題

「鈴木方鶴さんのこと」

講師

高澤南総氏(書家)

第3回

日時

9月22日(土) 2時

演題

「鈴木方鶴さんのこと」

講師

高澤南総氏(書家)

❖ 美術講演会

新聞記事のスクラップは過去10年に渡り用意していま

す。年度別に、内容を県内

展・県外展・美術評論・作

家情報・施設モニュメント

関係等に分けて記事を網羅

しています。

ここに、すでに決定している特別展「石井林響をめぐる作家たち」及び企画展「鈴木方鶴展」の開催期間中における3つの講演会を御案内します。

ぜひ多くの方々に御参加い

ただき、美術へのより一層の

興味と理解を深める機会とし

ていただければと思います。

本年度は、各展覧会に併せて美術講演会を5回実施しま

す。

美術館実技講座



陶芸講座

◎洋画入門講座(1)
期日 6月22・23・24・26・
27・28

友の会実技講座

講師 牛久 健治氏
定員 20名 締切 11月13日
(12日間)



洋画講座

5 4 4 3 3 2 10
17 2 1 23 13 13 第10回美術を語る会
常設収蔵作品展第I
学校巡回展会議
展示室利用団体事前
会議
講師 南部治夫氏
(1/7~15) 一部

員会・総会
千葉県博物館協会役

◆日本画講座
期日 6月19・20・21・23
7月1・3・4・6日 (12日間)
講師 斎藤 淳氏
定員 20名 締切 6月5日
洋画講座(2)
期日 8月28・29・30・31
9月4・5・6・7日 (10日間)
講師 小林 敦氏
定員 30名 締切 8月14日
書芸講座
期日 9月19・20・22 (3日間)
講師 高木 東扇氏
定員 25名 締切 9月5日

◆日本画講座
期日 6月19・20・21・23
7月1・3・4・6日 (12日間)
講師 斎藤 淳氏
定員 20名 締切 6月5日
洋画講座(2)
期日 8月28・29・30・31
9月4・5・6・7日 (10日間)
講師 小林 敦氏
定員 30名 締切 8月14日
書芸講座
期日 9月19・20・22 (3日間)
講師 高木 東扇氏
定員 25名 締切 9月5日

◆陶芸講座(2)
期日 10月23・24・25・26
11月20・21・22・23日 (9日間)

◎洋画入門講座(2)
期日 7月24・25・26・27
28・29日 (6日間)

◎デッサン入門講座(1)
期日 8月22・23・25・26日 (4日間)

平成2年4月1日付けで、
次の職員が異動しました。

◆転出者
池田 伊予 (研究員→千葉市立更級中学校)

◆退職者
中地 昭男 (研究員)

ごあんない・実技講座

◆書芸講座
期日 11月27・28・29日 (3日間)
講師 中村 象閑氏
定員 30名 締切 10月9日
彫刻講座
期日 11月27・28・29日 (3日間)
講師 中村 象閑氏
定員 30名 締切 10月9日

◆書芸講座(2)
期日 11月27・28・29日 (3日間)
講師 鎌田 和平氏
定員 30名 締切 10月9日
洋画入門講座(2)
期日 7月24・25・26・27
28・29日 (6日間)

◎洋画入門講座(2)
期日 7月24・25・26・27
28・29日 (6日間)

◎デッサン入門講座(2)
期日 10月25・26・27・28日 (4日間)

平成2年4月1日付けで、
次の職員が異動しました。

◆転出者
池田 伊予 (研究員→千葉市立更級中学校)

◆退職者
中地 昭男 (研究員)

◆洋画入門講座(3)
期日 12月1・2・4・5・
7・8日 (6日間)
講師 松沢 茂雄氏
定員 30名 締切 11月17日
洋画入門講座(4)
期日 1月27日
講師 天野 三郎氏
定員 30名 締切 12月13日

◆洋画入門講座(3)
期日 12月1・2・4・5・
7・8日 (6日間)
講師 松沢 茂雄氏
定員 30名 締切 11月17日
洋画入門講座(4)
期日 1月27日
講師 天野 三郎氏
定員 30名 締切 12月13日

◎デッサン入門講座(2)
期日 10月25・26・27・28日 (4日間)

平成2年4月1日付けで、
次の職員が異動しました。

◆転出者
池田 伊予 (研究員→千葉市立更級中学校)

◆退職者
中地 昭男 (研究員)

日誌抄

●転入者
佐久間芳夫 (文化課主幹→副館長)
神尾 吉夫 (千葉市立千城小学校→研究員)
藤川 正司 (文化課文化財主事→学芸員)
中村 博史 (千葉市立白井小学校→研究員)

◆新採用
中松 れい (技師)

訂正

平成元年11月13日発行・通
卷62号のVOLが間違ってお
りました。VOL17をVOL
16に訂正方よろしく願いま
す。

職員異動